

論文要旨等報告書

氏名	古田 美智子
授与した学位	博士
専攻分野の名称	歯学
学位授与の番号	博 甲 第 4 3 6 0 号
学位授与の日付	平成 2 3 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科社会環境生命科学専攻(学位規則第4条第1項該当)
学位論文題名	Gender difference in gingivitis relates to interaction of oral health behaviors in young people (若年者における歯肉炎の性差に関連した口腔保健行動の要因分析)
論文審査委員	教授 高柴 正悟 教授 鳥井 康弘 教授 森田 学

学位論文内容の要旨

【目的】

歯肉炎の罹患率は男性に比べ女性のほうが低いことが数多く報告されている。性差の原因として、生理学的要因および行動要因が考えられる。生理学的要因としては、性ホルモンや免疫応答などがあげられる。一方、行動要因では、歯磨き回数や歯科医院への定期的来院などの口腔保健行動に性差があることが分かっている。また、口腔保健行動に関連する因子として、口腔保健に関する知識、態度および生活習慣があるが、これらの因子には性差があると報告されている。しかし、口腔保健行動、知識、態度および生活習慣の相互関係の観点から、歯肉炎罹患率の性差の原因を調査した研究はほとんどない。そこで本研究では、大学新入生において、歯周病の初期段階である歯肉炎の性差の原因に、口腔保健行動、知識、態度および生活習慣が関与するのかが、その相互関係を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2009年4月に岡山大学に入学した新入生2,308名のうち、1,017名が歯科健診を受診した。そのうち、20歳以上および喫煙者を除外し、18~19歳の838名を分析対象とした。歯周組織状態は、Community Periodontal Index (代表歯10歯)で、口腔清掃状態は、Oral Hygiene Index-Simplifiedで評価した。歯肉炎は、プロービング時の出血の割合(%BOP)で評価した。アンケートを用いて、口腔保健行動(歯磨き回数、デンタルフロスの使用、歯科医院への定期来院)、口腔保健に対する知識、歯科受診・受療に対する態度や生活習慣の状況を調査した。統計分析では、%BOP、口腔清掃状態および生活習慣スコアの性差についてはt検定を用い、口腔保健行動、知識および態度の性差についてはカイ二乗検定を用いて検討した。また、歯肉炎に関連する因子の相互関係に性差が認められるかを調べるために多母集団分析を行った。

【結果】

男性と比較して、女性のほうが%BOPは低く($p=0.033$)、口腔清掃状態[Debris Index-Simplified (DI-S)]も良好($p<0.001$)だった。男性に比べ女性のほうが、歯磨き回数が多く($p<0.001$)、デンタルフロスを使用する者が多く($p<0.001$)、歯科医院へ定期的に来院するものが多かった

($p=0.002$)。また、女性のほうが、口腔保健に関する知識($p<0.001$)、歯科受診・受療に対する態度($p<0.05$)、および生活習慣スコア($p=0.003$)はいずれも良好であった。

多母集団分析の結果、「知識、態度、生活習慣」→「口腔保健行動」→「口腔清掃状態」→「%BOP」のパスが成り立ち、モデル全体で、性別間で異質性が認められた。モデルの各推定値の差異を検討したところ、特に、「歯磨き回数」→「DI-S」のパスは、男性において、 β (標準化係数)=-0.105($p<0.001$)と成り立ったが、女性では $\beta=-0.019$ ($p=0.086$)とパスは成り立たなかった。また、男性では「知識」→「定期来院」のパスは $\beta=0.070$ ($p<0.001$)と強く、「態度」→「定期来院」のパスは

$\beta=0.484$ ($p<0.001$) と強かった。一方、女性では「知識、態度」から「定期来院」への影響はそれぞれ $\beta=0.256$ ($p<0.001$), 0.507 ($p<0.001$) と強かった。

【考察および結論】

多母集団分析の結果、口腔保健に関する知識、態度および生活習慣の違いによって、口腔保健行動に違いが生じ、%BOPに性差がおこることが分かった。若年者において、歯肉炎の予防のために、男女で異なったアプローチをする必要があると考えられる。「歯磨き回数」→「DI-S」のパスが男性で成り立つが、女性では成り立たなかったことから、男性において、歯磨き回数を多くするように指導することは歯肉炎の予防に効果がある可能性がある。また、歯科医院への定期来院を促すには、女性では知識を与えるだけでよいが、男性では知識を与えるほかに歯科に対する態度を変える必要があると思われる。